

手の様子事の御不出來にて、御指も不殘腫申、別て右の御手殊の外御不自由の躰。見分の様子にては、中々筆など御持被遊事も、被爲成間敷相見え申候。御顔も餘程御瘦相見え申候。然共膚色膏潤、御精神は昔年に少も御劣被遊躰は相見え不申、御自分にも左様御覺被遊旨被仰候。今喜多益典藥も、何の効も無之と被思召候。不老湯漸半服程被召上候處、何の功も見え不申候内、頃日は御足などよほど腫も増候。不老湯の事能く存知の衆頃日罷越候て、腫の増候も面白候。有無に一二貼被召候様に申候衆有之に付、何とぞ二貼斗用候て御覽可被成候旨被仰候。近年は酒を曾て御用不遊候に付、右御藥もはか取不申候旨に仰候。今日も人に扶られ、御袴召候て漸々表へ御出被成、御講書被遊候。見難に論語有之候。定て此書御講と察申候。

候はん旨、今日被仰候由御物語にて候。御手の御様子は、兼て存候より御不出來に見請申候。御精神は兼て存知候よりは事の御宜しく候。先づ此分にては無御心元儀は、決して無之御様子にて扱々奉安堵候。御物語の儀共、左に粗相記し申候。

一、御役儀御斷の儀、先年被仰上候趣、御承知の通に御座候。今般又同事の趣を以て御斷の儀、御側衆に迄被仰達候。尤達上聞候御様子に候得共、何の儀も未被仰出候。此段貴丈へも未被仰進候由仰候。

一、當地學風日々邪に趨候儀不勝御嘆息候。詩文博洽を專として新寄の説を好み申候儀、一統の風俗に候。偶當地學者の内志有之ものも、多くは學問狭く候て詩文なども成不申候故、か様のもの、申候言をば一向用不申候。理學を主として、其上に詩文の才をも兼申ものは外に一人も無之、御自贊の様に候得共先生御一人にて候。それ故先生をば人も用申候。是を被思召候へば、少しの益も有之と被思召候。百年の後は學風如何罷成候やと、御嘆息被成候由。

一、菅彦兵衛事御尋申上候へば、久敷御逢不被遊候。是は元來下地無之、世話に申聞る法問にて候故、人用ひ不申候由。

一、大坂鈴木貞齋、只今は伊勢山田に居住申候。今日も書狀到來仕候。比日伊藤源藏山田へ罷越、一兩日逗留の内書を講じ候て朱子を抵排仕候。山田の俗學家聽聞尤成儀と申候。弟子を一人殘し置候。此もの毎日講談仕朱子を非り申

候。夥敷聽衆にて貞齋講席には、日々聽衆少く罷成候由申來候旨、兎角天下一統と被思召候由。

一、伊藤義助事よほどの人材と思召候。惜しき事にて歸泉候旨。其子貞右衛門御門弟にて、今日も御講席へ罷出候由。

一、三輪善藏事項日も假名書のもの出來。孟子の序説に韓退之の説を朱子被載事、大なる料簡違にて候。韓愈元來好色の人にて候。好色の人などの事を被載事、大なる料簡違にて候由調申候。多くか様の類、一笑を發し申事の由被仰候。

一、學而篇御筆記のもの、貴丈も御詩被成候。何とぞ不苦候はば幸私は當地罷在候。御下書のまゝ私方被遣候様に仕度奉存候。左候はゞ私方にて清書仕、尤合点參不申儀は御尋申上候て相調可申候。左候はゞ宜しきかと奉存候旨申上候へば、成程左様にも可被遊候。末二二章いまだ濟不申候。其上前も此間又御覽被遊候へば、か様にては無之と思召候所有之、いまだ濟不申候。とくと御濟し被遊候はゞ、さら／＼と下書御調、清書私へ可被仰付候旨御申に付、其御下書御調被遊候も不入ものに候間、それをも私相調可申旨申

上置候。いまだ御許容の御様子に無之候。以上。

十一月三日

小寺 遵路

一、麻疹流行の儀室鳩巢來狀先生御來書

尊慈御清健の旨珍重奉存候。彌四郎殿并御姉妹三人、麻疹御煩の所御快然の旨、殊御令愛様不殘御同病の内、御小産の方も候所御快復、別て御安堵の儀奉存候。劣甥新八郎夫婦并妹も同病、新八郎は餘程重く相聞え千萬無心元存候。乍去中西仙安療藥相應、當三日にも御尋に被遣候所、段々快候旨被仰下、先々致安堵候。其御地も家々麻疹の病人許多の由。當地も同然、大家小家共に家來大半疹にて、從者無之候故動も罷成、備夫も疹にて拂底難儀仕候由。珍敷儀私共七十に餘り申迄終不承事に御座候。尾張中納言殿、松平修理殿讀殿守殿御息、水戸宗對馬守殿何も疹にて歸泉、笑止千萬に候。其元も奥村伊豫守殿御死去の旨、讀大名麻疹御難之方は殊の外稀に候旨。扱々惜しき儀に存候。賤息忠三郎儀も疹に候所、輕く仕廻只今平復仕候。老夫手足の痛次第に不宜、寒氣故至て致難儀候。最早痼疾に極り候間、天命次第に仕り、是にて命を終り申覺悟に候。筆難叶候故草々申殘候。以上。